



## 聞法即救済

港区了善寺住職  
百々海真師

「一緒にお念仏を申しましょう。  
南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏…」

もしみおしえにあわざれば  
生まれしこともむなしけれ。  
もしよきひとにあわざれば  
今日のよろこびしらざらん。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏…。

ようこそお参り下さいました。東京港区の了善寺をお預かりしている百々海と申します。大谷派教団の首都圏支部（東京教区）の様々な活動で井上ご住職とご一緒する機会が多く、親しくさせて頂いております。私はひと回りほど年下の後輩です。どうぞ宜しくお願い致します。

まず大事なことを申します。私に与えられた時間は十二時半まで。延ばしません。（笑い）お疲れであれば目を閉じていただいても構いませんが、お喋りだけはご勘弁ください。

「ああ、本当だ！」「仰せの通り！」  
という一言に出会う。  
それがそのまま救いです。

## なぜ報恩講を勤めるのですか？

とここで、当たり前のことをお尋ねするようですが、報恩講つて何でしょうね。何で報恩講をお勤めするのでしょうか？しかも今日は本降りの雨、大変です。(笑い)私は東京から車で参りましたが、駐車場や門前に係りのご門徒さんが大勢おられて、カッパを着て、あるいは傘を差して車を誘導して下さいました。ご苦労なことですし、くたびれますよね。こんなことは、お寺では口に出してはいけないことのように思われるかもしれませんが、本当はそういう本音こそお寺で言ってもらいたいですね。

そこまでして、なぜ報恩講を勤めるのですか？なぜ大事なのですか？

親鸞聖人は、七五四年前に亡くなったお方です。にもかかわらず、今日は朝早くから、昨日のお速夜にもお参りしてくださいだったので。報恩講は、親鸞聖人のご法事です。先ほどの感話では田村さんがお父様の十三回忌をお勤めされたと言われていましたね。また最近は年忌法事を勤めない傾向さえあるようだとおっしゃっていました。確かに「法事は大事。キッチンと勤めねば」と言われもしますが、「なぜ大事なのか」と尋ねられたらどうお答えになりますか？それが不明のままであれ

ば、単なるしきたり、いつしか形が化すこととは避けられませんよね。

親鸞聖人の七五五回忌法要を何故勤めるのですか？言いかえれば、私も皆さんも、「今日ここに何しに来たのか」ということです。一日一日の積み重ねが一生になるのですから、単に今日一日に限定される小さな問いではないようです。

ですから「今日ここに何しに来たのか」という問いに、私たち一人ひとりが真向かいになる時こそが報恩講なのでしょうね。蓮如上人の『御俗姓』においても、「人目・仁義」(『真宗聖典』852頁)、つまり「義理があるから顔を出そう」とか「お寺さんの手前、行かないわけにはいかない」といった動機を果たす為の参詣では報恩講が報恩講にならないぞ、と。耳が痛いけど、まさに蓮如上人のご親切です。

私たちは、報恩講に限らず、例えば「人生とはまあこんなものだ」という具合にどんなことでも分かったことにしていますけれど、分かったつもりだったが本当は何にも見えていなかったという気づき、驚きが肝心なのですね。日ごろの思いから解放される時です。訓覇信雄先生は「仏教とは、わからんことを覚えることではない。わかるとると思っていたことが実は

少しもわかっていなかったと気づくことである」とおっしゃっています。とてつもなく深い一言です。

親鸞聖人は、仏教の本場である比叡山に二十年間おられたと伝えられています。現代でも比叡山と言えば「日本仏教の総本山」というイメージを持つ方が多いでしょう。皆さんどうですか。京都の寺といったら「東本願寺」と答えないと住職に叱られそうですが、テレビでも比叡山が映ることが多いです、例えば大阿闍梨が厳しい行を修められたというニュースが流れることもありますよね。当時の比叡山は、いわば国立寺院であり、日本仏教の一大センターでした。経典などの文献や修行の為の施設も整っていて、まさしく総本山、根本道場だった。ですが、比叡山にいなながらも、親鸞聖人は仏法に出遇えなかった。怠けていたのではなく、真剣に修行に打ち込んだのに仏法に遇えなかった。こんな不思議な話はないでしょ。本場中の本場で遇えなかったのですからね。でも、遇えるはずの場所で遇えなかったおかげで比叡山を下り、聖徳太子の導きによつて法然上人に出遇って仏道が始まったのです。

## 聞法即救済

さて、今日の講題は「聞法即救済」です。一ヶ月ほど前に、ご住職から「報恩講での法話の講題を決めてほしい」というご連絡をいただきました。一旦電話を切つて、ポツと浮かんだ言葉が「聞法即救済」でした。私の場合、考えて出た言葉は大体ダメ。出任せ、口から出るに任せるに限ります。

「聞法」とは、「聞仏説法」(『仏説無量寿経』「真宗聖典」103頁)。仏の言葉、真実の一言に遇うことです。根源的には「聞其名号」(『真宗聖典』103頁)、一声の念仏が聞こえる時です。ですから、法話鑑賞ではありません。私を言い当てる一言に遇うこと、および声が届くことです。聞法は救済の手段ではなく、即時の救済そのものです。歎異抄第一条に「とき、すなわち」とありますが、心の持ちようや心境の変化ではなく、「とき」、我が思いから解放される一瞬の到来が救済です。

報恩講は、親鸞聖人の法事です。であれば、親鸞聖人に出遇いなおす時。親鸞聖人が出遇った世界に私も出遇わせていただく出発点をいただく。お仲間と教えの受けとめを確かめ合うチャンスです。親鸞聖人の言葉を通して、無数の先人がよび覚まされてきた歴史が

浄土真宗です。人間の悪戦苦闘の歴史と別に浄土真宗があるわけではありません。

身近なところで言えば、こちら勝善寺様は当代のご住職が三十代とお聞きしています。すごいですね。天台宗の僧侶だった開基住職が、親鸞聖人のご門弟に出遇つて宗旨替えをなさったそうです。ご門徒の皆さんは、この由来をもちろん知っていますよね。：黙っているけど、大丈夫ですか。(笑い)つまり初代住職は、天台宗を選び捨てて、本願念仏の教え、浄土真宗を選び取ったわけですよ。その決断が代々伝わってきたのですね。

皆さんの家でも、きつとそうですよ。「ウチは代々真宗門徒」とか「嫁に來たから」と言われるけど、やはり一人ひとりが選び直すことです。選び捨てることも可能です。真宗とは縁を断つて、他所にお墓を移すことも可能です。お墓を移動してもご先祖は崇つたりしませんから。

それはともかく、「聞法即救済」という話に戻します。聞法というと、講師の話しを聞くことを思いますが、実は一言に遇うことです。仏とは真実、私以上に私を見抜いた智慧です。その智慧が言葉となって私に届く。親鸞聖人にとっては、よきひと法然上人の仰せ

が全部です。「ああ、本当だ！」「仰せの通り！」という一言に出遇う。それがそのまま救いです。信じる必要もなく、疑う余地もないほどあきらかに私を言い当てる下さる一言に遇う。それがそのまま救い、自分の思いが破られる時です。ですからお寺に通つていれば、徐々に分かるということではありません。そのことを「聞法即救済」という講題を通して申し上げたくて、今日はこへ参りました。

## 親鸞聖人

親鸞聖人にとって法然上人は、智慧のはたらき、つまり勢至菩薩です。法然上人のお姿は、右余間の掛け軸に描かれた七人のお坊さん、「七高僧」の一番右下です。親鸞聖人は、インド・中国・日本の七人の先達に本願の歴史をみておられます。その左側には聖徳太子のお像が奉安されていますね。親鸞聖人にとって聖徳太子は、慈悲のはたらき、つまり観音菩薩です。人を通して教えに遇っている。実に具体的です。仏道とは、出遇いなのです。法然上人からいただいた一言、「よきひとのおおせ」が親鸞聖人を導き歩ませた。問題に突き当たると、いつも帰り場所になって下さった一言です。思い出ではなく、いつも新しく、初事として響く一言です。

先ほどから色々と申していますが、その中で一つでも引つかかること、自分の考えとはどうも違うなあということがあれば後でぜひ聞かせて下さい。「今日はさっぱり分からなかった」といわれるなら、どこがどう分からなかったかを聞かせて下さい。それが大事なことです。

「アンタの話は最初から最後まで全部分からん」って、こういうのはダメ。一応日本語で話しているんだから。(笑い)「ワカラン」「ムズカシイ」という方は、実はご自分のイメージや予想と私の話が違っただけだったりします。「それは違うのではないか」という意見こそ、ぜひ聞かせて下さい。違和感を覚える箇所をハッキリとおっしゃって下さいね。

今日の講題は「聞法即救済」ですが、私に於いての親鸞聖人は、まさに「聞法即救済」という世界を見せて下さったお方です。一言との出遇いの他に救済はない。その一言が親鸞聖人の生涯の全てを尽くし、親鸞聖人を生きさせられたのでした。その一言は、南無阿弥陀仏であり、また念仏をすすめるよきひと法然上人の仰せでもありました。

だから法話を聞くということも、今日のこのご縁で申せば六十分間の話しを全部覚える必要はありません。頭を使う必要もありません。

ん。理解を超えて「アッ、これは私のことだ！」とピンとくる一言に出遇ってくださいばいいのです。それが聞法です。それは、日ごろの考え方、ものの見方が壊されることです。

話しを覚えることや仏教の知識を増やすことが聞法ではないのです。記憶力の競走ではないから、そんなことはどうでもいい。理解することでもない。肝心なことは、「今まで仏教だと思っていたことは、仏教ではなかった」という気づきがおこることです。

その気づきこそが比叡山を下りた親鸞聖人の上におこったことなのです。出遇ってみたら、比叡山の二十年は私に導いてくれたのだと。親鸞聖人は、比叡山で回り道をしたと悲嘆していません。仏教の本場中の本場で仏教に出遇えるかと思っていたら出遇えなかったからこそ、法然上人の一言に出遇うご縁をいただけ。よくよくのご縁であったと。

### 気づき、その瞬間が聞法です

皆さん方の中には、推進員や世話人のお役を引き受けた方がおられますよね。また出かけたくない冷たい雨の中をわざわざお参り下さっているわけです。だからこそ、「お寺って何をする場所なのだろうか」、「報恩講とは何だろうか」、「仏教って、自分にとってどんな関係

があるのかな」という最も基本的なところに立ち帰ることが肝心です。

それこそお寺にどれほど通っても、お寺の仕事を一生懸命に手伝っても不都合なことが起こる時には起こります。仏教は、全てが縁次第、条件次第という道理を説きます。運命やお祈りや厄除けとは一切無関係に、因(可能性)と縁(条件)が組み合わさって物事は変化するという道理を説くのが仏教なのです。今日は、せつかくの報恩講ですから、やはり晴れてほしかったのですが、残念ながら雨が降っています。私の都合からは困った雨、意地悪な雨ですが、天気は天気のご因縁のとおり、大自然の道理のとおりに動いています。厳粛に一部の狂いもなく、雨が降るべくして降っているのですね。

聞法は、心の持ちようをあらためることではありませんし、感謝の心になることでも決してありません。そこを間違えると大変です。報恩講は「報恩感謝」だと早合点されるのです。私たちは、自分の都合に合うことしか感謝できません。皆さん、今日の雨に向かって「報恩感謝」の心になれますか。私は今朝起きて雨が降っているのを見て、「なんだ雨か！」とムカつきました。(笑い)ところが車に乗ってこ

ちらへ向かったら、雨のおかげで高速道路はガラガラで「雨でよかつたな」と。雨を憎んだり、雨でよかつたとなったり、一人相撲を取っています。

ところで、こちらの副住職さんの師である大谷大学の水島見一先生が、来年の二月四日五日にお話に来られると寺報に書いてありました。ご門徒の皆さんは、もちろん来年のカレンダーに〇してあるでしょ。(笑い)ほんですよ！報恩講だけ来ればいいということではないんですから。来年の二月四日と五日は、二日間ともお参りしなければダメですよ。京都から来てくださるのですから、ご門徒の皆さんがお迎えしなければ。そして水島先生に徹底的にお尋ねしてください。先生は、きっとわからないとお話しをなさるから。(笑い)わからない話しが大事なんです。実は、わかる話というのは、私たちのモノサシに合う話なんです。感謝の心になるとか、ご先祖が喜ぶとか、腹が立たない人間になれるとか。坊さんは、都合のいいことばかり言いますからね。(笑い)また都合に合うように聞くのです。なかなか正しく聞けないのですよ。

先ほどの感話では、車のライトをつけずに走行する無灯火運転の危なさが取り上げら

れていました。無灯火運転。まさに私のことだなど思っていて聞いていました。光が無い。だから周りが見えていないのですが、そのことが見えていない。さらには、他人の無灯火運転は注意しますが、自分の無灯火運転への注意は素直に聞きません。「みんなそうじゃないか」って。

「聞法即救済」とは、実はそういう自分に目覚めることなんです。自分の物差しでは絶対に自分は計れません。モノサシは、他のものを計測できても、モノサシ自身は計れません。

繰り返しですが、「仏教とは、わからんことを覚えることではない。わかるとると思つていたことが実は少しもわかっていなかったと気づくことである」。もちろん仏教用語の意味を知ること大切です。例えば「菩薩」、「教行信証」、言葉の意味がわからなければ困ります。「正信偈」には何が書いてあるのかという学びも大事です。しかしそれだけで終わってしまったら、「仏教の知識が多少増えた」というだけです。私たちの日ごろの考えが破られる。「ああ、全然見えていなかったなあ」と知らされる。その気づき、その瞬間が聞法です。

### 「あん時はあん時、今は今や」

石川県の松本梶丸先生から以前お聞きし

た話です。浄土真宗には、ご門徒のお宅に毎月お参りに行く伝統があります。関東は真宗の宗風が定着していない土地柄ですから、月忌参りは少ないのですが、関東以外では当たり前前の伝統です。ある年の夏の暑い最中に、庭に大きなケヤキの木があるおばあちゃんのお宅に月忌参りに行かれたそうです。大きなケヤキのおかげで涼しい風が仏間を抜けていて、エアコンや扇風機がなくても心地よい。それで梶丸先生が「おばあちゃん、結構やね。このケヤキのおかげで涼しく暮らしてるね」というと、「ほんとにおかげさまでございます」とおばあちゃんは感謝していたそうです。

秋の終わりにお参りした時のこと。仏間に上がっても、おばあちゃんの姿が見えない。しばらくしてから、庭の片隅で箒を片手にケヤキの落ち葉と格闘している姿が見えた。住職が来ていることに気づいたおばあちゃんは仏間に上がつてくると、「御院(住職)さん、このケヤキのせいで散々や。毎日毎日掃いても掃いても、落ちてくる」と。(笑い)

松本梶丸先生はそう聞いて、「おばあちゃん、人間は身勝手なもんだね。夏は涼しくしておかげさま。落ち葉の頃になるとこのケヤキのせいで・とね」。

私たちの感謝もこのおばあちゃんと一緒にすね。「健康で感謝しています」とは言いませぬが、病気には感謝できません。所詮都合のいいことしか感謝できない。ウツトリした気持ちになるのは、都合のいい時だけです。私たちにはそういうモノサシしか無い。そしてそのモノサシに自分が振り回されているのですね。

話を戻しますが、梶丸先生は「ばあちゃん、人間は身勝手なもんだね。夏は涼しくておかげさまで言っていたのに、落ち葉の頃になるとこのケヤキのせいとなるんだね」と言ったのです。そこでもしそのおばあちゃんが「ほんとは浅ましい根性です」と言ったら、話しが上手すぎます。(笑い)私は、そういう話しは信用しないようにしています。

では、おばあちゃんはどう言ったか。「あん時はあん時、今は今や」と。(笑い)見事です。私たちにはこれしか無いんです。「損が嫌いで得が好き」、これは仲野良俊先生のお言葉です。元気ならば長生きしたい。(笑い)だけれど長生きしているうちに退屈にもなりますから、損得の尺度ではどうなっても喜べないのです。誰も不真面目ではないし自分なりに幸せを求めて頑張ってきた。けれども、実は自分がどうなりたいたいのかがわからない。どうなる

ことが真の満足なのか。これは、現代が直面している課題でもあります。

### 一切は因縁による

実は私たちには、絶対に思いどおりにならないものがあります。それは自分、わが身です。お釈迦さまは、そのことを問題にされ、悩まれたのでした。人間は生まれた限り、老い、病み、死なねばならない。「死なねばならぬが、死にたくない。死にたくないが、死なねばならぬ」と言われた念仏者がいますが、その通りです。いつまでも若く元気でありたいのに、この身は私の希望を裏切る矛盾。この身は道理のままに、因縁によつて運ばれています。その世界は「如」、ありのままの世界、分別以前です。つまりあらゆるものが、私の思い、分別とは無関係に、因縁によつて成るべくして成っているのです。仏教は、運命ということ語りません。藪から棒にという具合に原因無くして起こるとも言いません。奇跡も語りません。一切は因縁による。原因(因)と条件(縁)によつて、物事は成る。因縁の法は厳粛で狂いが無いのです。

富山県のあるおばあちゃんから、東京で暮らす三人のご子息にいつも言っている言葉を聞かせてもらったことがあります。それは「会

社の仕事も、家庭でも、あるいは町内会の仕事も、どんなことでも手を抜かず一生懸命にやりなさい。でもな、一生懸命やったからといって、思い通りの結果が出るかどうかは、ご因縁さまやぞ」でした。「頑張ればできる」「心掛けさえすれば何とかなる」と縁を無視する私に、因縁の法で運ばれていることを知らせ、足下の現実に戻せしめるはたらきが阿弥陀なのです。阿弥陀さまとは、「ご因縁さま」だったのですね。だから「帰命せよ」と。毎田周一先生は「帰命とは、帰れという命令である」といわれます。本来に帰れと。帰れとよばれているのは、身を離れて思いが浮遊しているからです。その姿が一瞬照らし出される。言葉によつて言い当てられる。「ああ、そうだった。またやつておりました」と照らし出される時が「帰命の一念」です。

清澤満之先生はこの身を「現前の境遇」とおっしゃいますが、今ここにあるこの身には遺伝的体質も具わっていますよね。例えばウチは糖尿病が多いとか、あるいはガンの家系だという具合に。仏教では「宿業」と言いますが、いのちの歴史が私に成っているのです。科学で言えば遺伝子情報ですが、私の希望と無関係ですよ。つまり私という存在は、そもそも

如意ではない。思いを超えているのです。そう思っても思えなくても、ご因縁のままなんです。生まれてきたら戦争の時代だったということもあります。「世が世なら」と言いたくもありません。という具合に私の都合とは関係なく、その時その時の因縁によつて狂い無く運ばれているのです。平易に申せば「生かされている」ということです。だから苦しいし、時には自分の境遇を怨む他になくなるのです。

私を成り立たせているはたらきの世界、分別以前のありのままの世界を「如」といいます。運命でも無く、誰かが支配しているのでもなく、様々な縁(条件)が重なつて今ここにこうしてある。全ては必然である。成るべくして成っている。わが身自体が因縁の法則によるのです。飛行機に運ばれているようなものです。それが分別以前の身の事実なのです。

ところが自分の都合、エゴを立場にして生きてるのが今日の私です。因縁を無視するのです。先ほど言ったように、雨が降ると雨を恨むのですよ。都合のフィルターを通してしか物事を見れないのです。私たちが立場にして自分の都合、エゴを親鸞聖人は「自力の心」とおっしゃいます。「自力の心」は、「損が嫌いで得が好き」ですから、瞬時に物事を比べま

す。先ほど話したように、同じケヤキの木が都合によつては恩人に、時には加害者に。それでいて、自分が立場にしているわが思いは真つ当だと思つているのですよね。

宗教に対しても同様ですね。都合に合うように状況を変えてくれるのが宗教だと信じて疑わないのです。それでは浄土真宗は、わかるはずがない。例えば節分。「福は内、鬼は外」。「福」と「鬼」を分ける基準が「自力の心」です。真宗の教えに立つて、節分を見直すとどうなるか。池田勇諦先生は「仏法聞く身になつたら、豆をまきながら自分が出ていかにやらんわ」と。仏法聞いていらつしゃる人は鬼と言え、自分だと知らされているから、「鬼は外」と言いながら、自分が外に出て行かなければいけない。(笑い)自分の思い通りにしたいと暴れるのが鬼ですからね。だから仏法を聞くと、節分の意味が変わるんです。

つまり仏法を聞くということは、感謝の生活を送るとか心が豊かになるというような心境論ではないのです。親鸞聖人は「一如宝海よりかたちをあらわして、法蔵菩薩となのりたまいて、無碍の誓いをおこしたまうをたねとして、阿弥陀仏と、なりたまう」(『一念多念文意』真宗聖典523頁)と。つまり私たちが成

り立たせている「如」の世界から、絶対現実そのものから、私たちをよびかえすのが阿弥陀仏だと。「足下に帰れ」という命令が「正信偈」の冒頭の「帰命」です。「帰命」は、「南無」と同義語です。

親鸞聖人は、「如来は、光明なり。光明は智慧なり」(『一念多念文意』真宗聖典523頁)とおっしゃいます。ご家庭のお内仏(仏壇)の左右、お脇掛けに「歸命盡十方无尊光如来」、「光如来」とありますね。お帰りになつたらぜひ確かめて下さい。左右共に最後の三字は「光如来」。「光が来る」ということです。因縁の催しに運ばれていながら、そのことを見失つている私を照らし出し、「あなたの都合に合つても合わなくても、今、此处に帰りなさい」と。「光が来る」というのは、「見える」ということです。居るべきところに居ない、ウロウロしている自分が見える。ですから現実逃避やうつとりした気持ちになるとか、腹の立たない人間になるのではなく、腹の立つ根性のまま、エゴ丸出しのまま南無阿弥陀仏。一声の念仏が「帰れ」とおよびかけ下さっているのです。真宗は、まったくもつてこれだけです。一声の念仏に尽くされます。わかつたようではない話でしょ。わからなくても結構です。私の力

では、これしか言いようがない。

### 既に成っているところに帰らせる教え

仏教は、理想の自分に成らせてくれる話ではなくて、既に成っているところに帰らせる教えなんです。私はそう教えられています。だからわかりにくい。難解というよりも、私たちのモノサシに合わないのですね。例えば浄土に生まれる、往生浄土と聞いても、「今以上の都合の良い場所に連れて行ってもらえるんだな」と思うのが私たちですからね。「極楽浄土だから、結構な楽しい場所をイメージしますが、蓮如上人は釘を刺していますね。「極楽は楽しい」と思っていると、ぜひ行きたいと願望する人は仏に成れません」(『蓮如上人御一代記聞書』23条・取意)と。蓮如上人は、すごいお方ですね。

仏教では、人間の思いどおりになる世界を「天」と言います。「地獄」、「餓鬼」、「畜生」が迷いの世界を指す言葉だということは、語感でもわかります。ところが、六つの迷いの世界、「六道」には「天」も含むのですよ。「天」は迷いの極致なのです。源信僧都は『往生要集』という書物の中で、「天」という人間の理想郷は地獄の16倍の苦しみを受ける世界だと仰っています。なぜ16倍なのかは不勉強で知りま

せんので、大学院におられる副住職さんに直接聞いて下さい。地獄よりも苦しいというのは、理想を追い求める辛さよりも、思い通りになった後の空しさ、退屈は逃げ場所が無いというのでしようかね。目標がある間は、きつくても頑張れますが、達成した後に、例えば貯金もできた、仕事も後継者に委ねた、ローンも完済した、長年の夢が叶った。その後の問題は退屈でしょう。思いどおりになったら喜べるはずなのに、「夢見てるうちが花だった」。こういう言葉は、実に深いですね。人間は人間の都合が叶っただけでは、満足できないのです。むしろ、都合に合うものばかりを追い求める思いから解放する、人間解放が仏法です。人間の思い描く理想郷である「天」と本願の国土である「浄土」は異質なのです。

「有頂天」という言葉は、仏教の言葉です。頂上があるということは、その先は崖ということでしょう。アメリカのトランプ次期大統領も、今は嬉しいでしょうが、その内に「大統領になんかならなければよかった」となるかもしれません。韓国の大統領は、きつと「権力を手にしたばかりに・・・」と大統領になったことを悔やんでいるでしょうね。夢が叶うことを無意味だと言っているではありません。目標を立

てて努力するのはむしろ大切なことです。ですが、どうなることが真の満足かを知らないということを私自身が知らない。ですからどうなっても真の満足無し。実は、どうなっても救い無しだぞと知らせて下さるのが仏法なのです。

私たちの存在は、宇宙を一貫している道理そのものなのです。仏法の「法」は法則です。ですから仏法を聞いても聞かなくても成っていることを言葉で説いているのです。一切が原因と条件が結びついて成っている。清沢満之先生は「宇宙万有の千変万化は、皆な是れ一大不可思議の妙用に属す」と。林暁宇先生の意識では「この世の一切の出来事はすべてこれ不可思議な絶対他力のはたらきによるものであります」。あらゆるものは「一大不可思議の妙用」、人間の思いを超えたご因縁の活動である。縁あつて在る。縁あつて滅する。「つくべき縁あればともない、はなるべき縁あれば、はなる」(『歎異抄』第9条)。万事縁次第。心がけとかジंकストとか厄除けとか先祖のご加護とか、そんなことではない。私たちが納得しよう、しまいと全部がご因縁さまです。阿弥陀様というのは、因縁の世界を知らせようとするはたらき、ご因縁さまです。先ほども申し

ましたが、富山のあるおばあちゃんから「因縁さまと聞かされたことで、私は仏法の仕組みをハッキリと教えられました。」「ご因縁さま」という言葉は、仏教辞典にも『真宗聖典』にもありませんが、実に確かな受けとめです。こういう言葉が生まれてきた歴史こそ、お念仏の歴史ですね。納得できない厳粛な事実、実に帰せしめられた人が、その悪戦苦闘が生ま出した一言なのでしょう。

### 近田昭夫先生

本山発行の『報恩講』の冊子に「そんなことではない！」という近田昭夫先生の一文が載っています。近田先生は昭和九年のお生まれですが、今年の初めに脑梗塞を発症なさいました。実は私の父、先代住職は浄土に帰りましたが、その父と先生は一歳違いで親しく、いわば親子二代でお育てをいただいている先生です。先生がリハビリで入院中に感得されたことを書いてくださっています。

そんなことではない！

近田昭夫（東京教区顯真寺前住職）

報恩講とは、親鸞聖人の教えに出会い直す、大切なけじめの御仏事であるが、伝統的には「御開山聖人御出世の御恩」（蓮如上人

『改悔丈』真宗聖典八五三頁）に出遇うチャンスである。

今春、私は病床で実語（ほんとうの言葉）に出遇えた。

真宗の教えを長年聴聞してきたにもかかわらず、念仏の真意に昏かった身に気づかされた入院生活であった。

思わぬ発病で緊急入院、リハビリ病院に移ってから、あれこれ思い悩む毎日だった。来し方の八十年も反省するばかりだったし、聞法も中途半端であったことに思い至り、何とか心を立て直したいと焦ってばかりいた。

そんな煩悶のさなか、同室の重病人から助言された。「あなたは病人になっていません。ここに入った以上、病人になつて病氣療養することです」と。

おつしやるとおり、老病死の身を忘れて、心の良し悪しに振り回されていた愚かさに、目がさめた。自分の愚かさに気づいたら、今なすべきことがはっきりした。病院のルールに従い、リハビリに専念すると吐が決まった。吐が決まったら、心の思い悩みは吹っ飛んでいた。身は正直、ありのまま。心は不正直——というのは本当だった。

ほればれと念仏申していた坂下トクさんと

いう方の常の言に、「仏語二虚妄ナシ、ナンマンダブツナンマンダブツ」という言葉がある。

『歎異抄』第九章には、「しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫（身の事実に在りながら、心で思い悩んでばかりいる愚かものよ）とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけり」としられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり。」（真宗聖典六二九頁）とある。

如来・聖人の仰せに嘘はありませんでした。曾我量深先生に生涯師事された越前武生の松原現筈師は、「聞法第一の真宗と申しますが、何をどう聞いたらよろしいのですか」の問いに『そんなことではない』と知らされるんじや」と一喝されたという。

言亡慮絶、念仏に出遇ったら、心の迷いは消え失せます。

近来、真宗の力が失せている現状を思うに、まじめな人ほど、自分の心のありようを反省し、仏法にかなう心になろうとする精神論的傾向にある。本願他力の教えは、存在論と聞かされた。

身の事実を棚上げして、心のあれこれに思い惑う愚かさを知るべきではないか。

今度の入院生活中、その愚かさを知らされ

た。

そんなことではない——とよびかけられていた。

なかなか自分に驚かぬ身であります。

先生は、お元気な方だったので、今までご入院されたこともなく、ご高齢ではあつても身体に自信があつたんでしょう。だから病人の身を生きながら病人になつていなかつたんでしょうね。つまり身はリハビリを必要とする患者だけど、思いはその事実にならずに帰るということなんです。「私が私である」ということに帰れない。お釈迦さまが悩まれた問題ですね。

そんな最中に同室の病人から言われた。「あなたは病人になつていません。ここに入った以上、病人になつて病氣療養することです」。この一言が如来です。光明です。そう言つた同室の方が真宗門徒であるか否かは全く関係ないことなんです、冊子に取り上げられていることもきつとご存じないでしょう。ところが聞かされた近田先生にとっては、この一言が如来。仏さまなのです。私はそう読みます。

### 時節到来

かつて坂東性純先生が言われた譬えですが、仏法の言葉が聞こえるというのは、十年ぶ

りに自転車に乗る機会が与えられた時、ひよいと乗れるようなことだと。筋肉をこのように動かして、前後左右のバランスをとつて、という理論は必要なく、自分の身がひよいと動き出す。そのように何かに突き当たつた時、かつて聞いたことが聞こえてくる。覚えておこうとノートしておいたからということではなく、まさに時節到来。一瞬間聞こえる。聞法のおかげさまですね。

先ほどの同室の方の一言も、そう言つた方は、また聞法のご縁がない人にとっては単なるアドバイスに過ぎないでしょう。むしろ日常生活で度々耳にするような言葉でしかありません。「あなたは病人になつていません。ここに入った以上、病人になつて病氣療養することです」。もちろん仏教用語も使われていませんし、こう言つたお方自身も深く考えて言われたのではなからうと拝察します。ですが、この一言が「帰れ」という命令と聞こえたのです。如来の天命と聞こえる耳が信心の世界。この一言が聞こえた時、「おつしやるとおり老病死の身を忘れて、心のよし悪しに振り回されていた愚かさに目がさめた」と。「おつしやるとおり」。言われたまま、仰せのまま、言い当てられたのです。考える必要も、理解することも

不要。その通りの私がここにおります、南無阿弥陀仏と。

### 本當のことを知らずにいたと知つた智慧 こそ、人類最高の智慧

親鸞聖人は、仏法に照らされた姿を「愚か」とおつしやっています。真実が見えていないということだけは真実なのです。それこそ無灯火運転です。無灯火運転しているお前だぞとよびかけて下さるはたらきに生涯を通して出遇い続けたのです。それこそ死ぬまで法然上人の仰せ一つ。南無阿弥陀仏一つ。曇鸞大師のお言葉、聖徳太子のおよび声、あるいはご家族や門弟の一言にハツとさせられたこともきつとあつたでしょう。

ですから状況を改善する救いではない。病人は病身を尽くす他になしという、至極当たり前のところに帰してくださるのです。自分からは決して帰れません。そう思えばいいのですね、という心の工夫でもありません。「世の中にはもつとひどい人もいるのだから、これで良しとしなくちゃ」という妥協がせいぜいですから、自分より元気な人に会つたらクシユンとなるだけです。足下には自分からは絶対に帰れないから、南無阿弥陀仏なのです。南無、帰命までご回向なのです。

「病院のルールに従い、リハビリに専念すると  
吐が決まったら、心の思い悩みは吹っ飛んでい  
た。」「身は正直、ありのまま。心は不正直―  
というのは本当だった」と。

不正直な心を正直な心に改良する話しは  
倫理道徳です。宗教は倫理道徳とは違いま  
す。宗教は理想の人間に仕立て上げる営みで  
はなく、人間の本質を言い当てる真理です。  
ですから、不正直な心を立場にしていること  
を知らない私が不正直だと知らされた。そう  
知らせた智慧は最上の智慧なんです。本当の  
ことを知らずにいたと知った智慧こそ、人類  
最高の智慧なんです。私の意見を力説してい  
るではありませんよ。ソクラテスが言っている  
んです。急にソクラテスなんて言つて・・・(笑  
い)私が発見したのではなく、清沢満之先生が  
教えてくれたんです。哲学者ソクラテスは、  
「無知の知」、自分は何にも見えてないとい  
うことを知つたと言われた。ソクラテスは、お釈  
迦さまとほぼ同時代の方です。古代インドの  
お釈迦さまは、何と言つたか、「無明」、光が  
無い、無灯火運転と言われた。お釈迦さま  
は、真実が見えていないのが苦悩の根本原因  
と目覚めた。中国の孔子は、「知らざるを知ら  
ざる」とせよ。是れ知れるなり」と。知らない

ことは知らないとするのが知るといふことだ。  
逆説的ですよ。

まさに「仏教とは、わからんことを覚えるこ  
とではない。わかると思っていたことが実は  
少しもわかっていたいなかったと気づくことである」  
です。

近田先生のことと申せば、病室の景色が一  
変した一瞬が到来したのです。また元に戻り  
ますよ。解放は一瞬なんです。持続する力な  
んで、凡夫にはありません。だから死ぬまで聞  
くのです。毎日聞くのです。

私が抱える愚かさが一瞬照らされる。どん  
な時にも比較しては、損得を争う。仏法を聞  
くと、それしかないわが身だと知らされるの  
です。そんなことから卒業できるのではな  
く、だからこそ南無阿弥陀仏。迷いを迷いと  
照らし出す光明は、迷いを超えています。

「無知の知」どころか、何でも知っていると  
思っていますから、私自身は、まったくこの逆で  
す。サラリーマン川柳に「会議中 うなずく者  
ほど 理解せず」(笑い)とありました。ズバリ  
言い当てている川柳ですね。ある念仏者はこ  
ういう歌を残しています。「説法 小首納得  
しない自我」。ウンウンと頷きながら法話を  
聞いていますが、根底の自我は絶対に背きづ

め。照らされてみれば、背いていることまでも  
お手回し、他力なのですが・・・。

絶対の現実に帰れというおよび声が、南無  
阿弥陀仏。無量寿に帰れ。ご因縁さまに着地  
せよ。その一瞬を「一念」と言います。「正信  
偈」に「能発一念喜愛心」あるいは「慶喜一念  
相応後」と、「一念」は2回出てきます。ハッと  
する目覚めの時、驚きの時ですね。「ああそう  
か!」と。山越初枝(やまこし)はつえ)さんと  
いう北陸のばあちゃんの言葉ですけれど、「一  
念というたら今のひと思い。ありやあというこ  
つちや」。「ありやあ」というのは北陸の方言で  
すが、わかりますよね。見えていなかったな。  
分かっているつもりでいたな。自分を縛っている  
自分の思いからの一瞬の解放ですね。

時間が来たので、そろそろやめます。「延ば  
しません」と約束しちゃったし。(笑い)今日は  
アレコレと思いつくままに話しましたが、「東京  
から来た者が妙なことを言っていたけど、ホン  
トかな?」と思われる方は、深く学ばれている  
ご住職や副住職がおられる勝善寺さんなの  
ですから、ぜひ疑問や感想をぶつけてくださ  
ればと思います。お互いに真宗の門徒になり  
続けていく歩みをいただきたいと願うこと  
です。

## 寺は、生活実験相談所

最後に一つだけ言わせて下さい。

暁鳥敏師、藤原鉄乗師と並んで「加賀の三羽鳥」と謳われたお一人、高光大船という先生がおられました。明治十二年に生まれ昭和二十六年に亡くなっておられますので、私は会ったことはありませんが、金沢の郊外、北間の専称寺のご住職だったお方です。いわゆる学者ではありません。生活即仏道という世界を実証して下さいましたお方です。その高光先生のお孫さんが来年の二月に来られる水島見一先生です。きっと高光先生の世界をお話下さるだろうと思います。

その高光大船先生が一時期自分のお寺に掛けていた看板が「生活実験相談所」でした。現代ではお寺の存在意義が不明だと言われるかもしれませんが、まさに「生活実験相談所」なのです。先祖供養、死者供養という視点だけでは、お寺の存在意義なんてわかるはずがありません。「生活実験相談所」。戦前のことだそうですが、今聞いても斬新です。きっと嫁姑の問題とか、先行き不安とか、死の問題とか、いろんな問題を持ち寄って来たのでしょう。実験結果を持ち寄ったのでしょうか。生活実験ですから。「また自分の思いに振り回

されておりました」という実験結果でしょう。

乱暴なことばかり申しあげて恐縮でしたけれども、房総の南端に近いこの場所でお念仏の僧伽がいよいよ歩んで下さることを願って法話を終えさせていただきます。三分過ぎましたね。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏…。(拍手)

### 拍手は場違いです

余分なことを申しますが、拍手はいりません。(笑い)法話鑑賞ではないからです。鑑賞しているモノサシが砕かれるのが聞法です。話しの上手い下手を評価するのではなく、仏徳讃嘆が法話です。仏さまのお徳を讃嘆する。皆さんは聞くという形で讃嘆する。ですから、お互いにお念仏しかないので。「結構な話でした。パチパチパチ」、拍手は場違いです。講演会ではありませんから。最近、本山に行つても拍手が出るようになりました。(笑い)中には、「感動して拍手しているのだから、うるさいことを言わなくてもいいのでは…」という声まで上がるようになりました。とんでもない話です。感動したから拍手する、感動しないから拍手はしない。それは聞法ではなく聞話、法話鑑賞です。いつでもどこでもお念仏です。実はこのことは浄土真宗の生命線です。聞仏説法ですからね。しつこくすみません。(笑い)

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏…。



これは、港区了善寺住職 百々海真師が、勝善寺報恩講(二〇一六年十一月十九日(土))でお話しになったものです。感銘を受けた何人かのご門徒に促され、また、「聞仏説法」の生活をする仲間が生まれることを願い、文章化しました。

二〇一七年一月八日

勝善寺住職